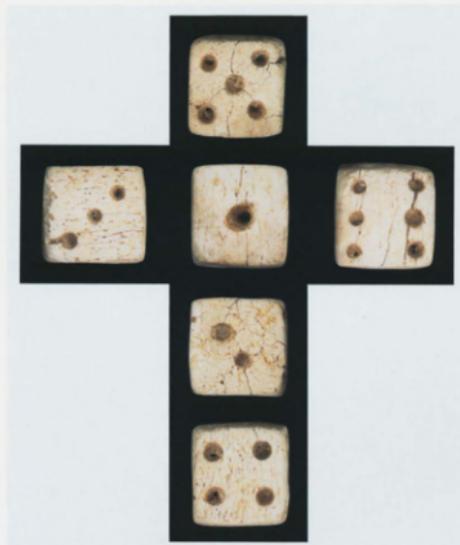


ウーバルグスク発掘調査報告書

—一般県道佐仁万屋赤木名線の特定交通安全施設等整備に伴う発掘調査—



サイコロ展開写真

1999年3月

笠利町教育委員会

ウーバルグスク発掘調査報告書

—一般県道佐仁万屋赤木名線の特定交通安全施設等整備に伴う発掘調査—

1999年3月

笠利町教育委員会



掘り込み遺構から出土した埋木



グスクへの道遺構



骨製サイコロ出土状況

報告書抄録

フリガナ									
書名	ウーバルグスク								
副書名									
卷次									
シリーズ名	笠利町文化財報告								
シリーズ番号	No.25								
編集者名	中山 清美								
編集機関	笠利町教育委員会								
所在地	鹿児島県大島郡笠利町中金久								
発行年月日	平成11年3月31日								
フリガナ									
所収遺跡名	ウーバルグスク								
フリガナ	カゴシマケン オオシマグン カサリチョウ グスク								
所在地	鹿児島県大島郡笠利町大字城927-1								
調査期間	1998年8月1日~1999年3月31日								
調査面積	約600m ²								
調査原因	道路拡張工事に伴う								
出土 遺物 ・ 遺構	<table border="1"> <thead> <tr> <th>主な時代</th> <th>主な遺構</th> <th>主な遺物</th> <th>出土量</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>グスク時代</td> <td>マージ掘込み 道遺構</td> <td>青磁 白磁 類須恵器 石器</td> <td>少 量</td> </tr> </tbody> </table>	主な時代	主な遺構	主な遺物	出土量	グスク時代	マージ掘込み 道遺構	青磁 白磁 類須恵器 石器	少 量
主な時代	主な遺構	主な遺物	出土量						
グスク時代	マージ掘込み 道遺構	青磁 白磁 類須恵器 石器	少 量						

序 文

笠利町における埋蔵文化財の発掘調査はここ近年毎年のように行われています。奄美大島の中でも特に遺跡が多く、先史時代や古代人達の足跡を知ることが出来ます。中でも昭和61年10月7日に国指定になった宇宿貝塚をはじめ、多くの遺跡が現在の私たちに何かを語りかけようとしているようです。郷土に残る文化遺産を大切にし、郷土学習や郷土を愛する一助になればと考えます。

さてウーバルグスクは笠利町内に所在するグスクの中でも辺留城と並んで笠利地区の代表的なグスクです。今回道路整備に伴いウーバルグスクの西端の一部分を発掘調査することになりました。道路整備としての開発に先だち埋蔵文化財の調査が行われたことは今後の文化行政を進める上でもとても素晴らしいことと思います。鹿児島県教育庁文化財課、大島支庁土木課の方々には適切な行政処置をして頂きました。なお発掘調査期間中には多くの方々の御指導を得ることが出来ました。特に熊本大学名誉教授白木原和美先生にはご来現頂きまことにありがとうございました。また、ウーバルグスクに携った多くの方々に心からお礼を申し上げます。

1999年3月19日
笠利町教育委員会
教育長 福元 廣一

例 言

1. 本書は鹿児島県大島郡笠利町大字城927-1に所在する「ウーバルグスク」の発掘調査報告書である。

2. この調査は鹿児島県大島支庁土木課が進める事業で「一般県道佐仁万屋赤木名線」の特定交通安全施設等整備工事に伴うものである。

3. 調査期間は以下の通りである。

発掘調査 1998年(平成10年)8月1日～9月25日

整理調査 1998年(平成10年)10月1日～1999年(平成11年)3月31日

4. 発掘調査は笠利町教育委員会が鹿児島県文化財課の指導等を受け中山清美が行った。

5. 本報告は中山清美が執筆した。

6. 遺物、地形図の実測、トレースは中山清美、中野晴美が行い、写真等については中山が行った。

7. 出土遺物及び図面は笠利町歴史民俗資料館に保管している。

※ 出土遺物の青磁、白磁については手塚直樹氏より指導を受けた。

目 次

本文 目次

第1章 遺跡の概観	1
第1節 笠利町の地理的環境	1
第2節 笠利町の歴史的環境	2
第3節 遺跡の位置とその周辺	9
第2章 調査の概要	12
第1節 調査に至る経緯	12
第2節 調査組織	12
第3節 調査の経過	12
第3章 出土遺物・遺構	16
第1節 出土した陶磁器	16
第2節 出土した石器	19
第3節 出土したサイコロ	19
第4節 遺構	19
第5節 層序	21
第6節 表採資料	25
第4章 結語	26
付説 ウーバルグスクに関する昔話	32

挿 図 目 次

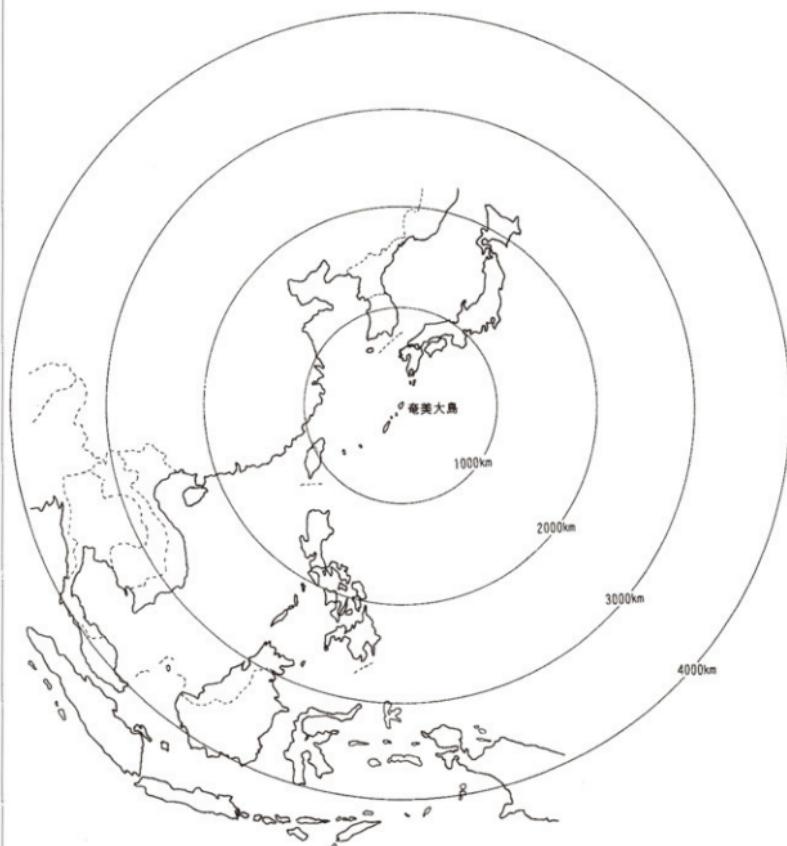
第1図 奄美大島位置図	3
第2図 奄美大島グスク分布図	4
第3図 ウーバルグスク周辺遺跡分布図	8
第4図 笠利地区のグスク配置図	10
第5図 ウーバルグスク地形図	11
第6図 ウーバルグスク調査区域図	13
第7図 ウーバルグスク調査地区平面図	15
第8図 出土遺物（青磁）	17
第9図 出土遺物（類須恵器）	18
第10図 出土遺物（サイコロ）	19
第11図 石器	20
第12図 南地区道路遺構平面図	22
南地区道路遺構断面図	22
第13図 土層断面図（南面）	23
土層断面図（東面）	23
第14図 北区平面図	24
北区断面図	24
北区土層断面図	24
第15図 表採資料	25

図版目次

卷頭図版	掘込み遺構	
卷頭図版	グスクロード	
卷頭図版	サイコロ出土状況	
図版1	ウーバルグスク遠景（南側）（南西）（西）	33
図版2	ウーバルグスク遠景（北側）、ウーバマ海岸より。ウーバマ近影	34
図版3	ウーバルグスクの植物、海岸、溝下の墓	35
図版4	北区（北西侧）、西側、南側から	36
図版5	北区 有段、発掘スナップ、有段南から	37
図版6	北区 スナップ、ユンボ使用	38
図版7	北区 グスク層検出、溝斜面、土納詰め	39
図版8	北区 グスク西、斜面観察、斜面スナップ	40
図版9	南区 南区、北西より、南より	41
図版10	南区 スナップ1、2、3	42
図版11	南区 土納詰め、南区 第3トレンチ	43
図版12	南区 スナップ。亀裂入る。亀裂部分を取り除く。	44
図版13	出土遺物	45
図版14	現場視察、整理状況、出没したハブ公	46

表目次

第1表	奄美大島グスク分布地名表	5
第2表	出土遺物観察表（1）	27
第3表	出土遺物観察表（2）	28
第4表	出土遺物観察表（3）	29
第5表	自然 遺 物 貝（1）	30
第6表	自然 遺 物 貝（2）	31



1:50,000,000

南島広域図

第1章 遺跡の概観

第1節 笠利町の地理的環境

九州から台湾にかけて島々が弓状に連なっている（第1図）。これらの島々は南島、南西諸島または北部をトカラ列島、中部を奄美諸島、沖縄地方、八重山諸島などに呼び分けられている。奄美はこれらの中の島々のほぼ中央の中部に位置する。奄美諸島は有人島の8つの島がある。大島本島、喜界島、加計呂麻島、請島、与路島、徳之島、沖永良部島、与論島がある。その中でも、大島本島は最大の面積（719.46m²）を誇り、琉球弧の中では沖縄本島に次いで大きな島である。奄美諸島は北緯27°02'から28°23'、東経128°26'から130°23'に位置する。1953年（昭和28年）12月25日アメリカからクリスマスプレゼントとして沖縄より先に日本に返還されている。

島々の基盤は喜界島を除いて古期岩帯に属し、古い堆積岩と花崗岩を主体とする。奄美大島や徳之島には、約2億5千万年前の古生代に堆積した地層もあり、当時の琉球列島は秩父地向斜という海であったとされる。^(注1) 次の中生代末～新生代初めも四万十地向斜という海で奄美大島、種子島、屋久島などの地層にはアンモナイトが発見されるのもその証拠とされる。その後約1,500万～1,000万年前の新生代中新生世のころに陸化して、イリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギなどが入って来たと考えられるという。その後800万～200万年前の鮮新世には海が広がり、喜界島などには島尻層群が堆積した。200万年前になると陸化が進みゾウ、シカ、ハブなどが入って来たと考えられている。このように地学からも南西諸島はいくつかの岩帯が九州から台湾にかけて走っている。

大島本島は海板400メートル以上の山稜がほぼ南北にのび、本島中南部は急峻で海岸に迫り海崖を形成している。山地は古生層とそれを貫く花崗岩類で地形は壯年期の特性を有する。北部の笠利は断丘をなし、砂礫やラテライト質土壤に被われている。徳之島も大島本島と同様に古生層と花崗岩、輝綠岩などを有する。山岳の周縁部は海拔200メートル以下で主として琉球石灰岩による台地が多い。喜界島は標高203メートルの百の台地で約60km²の島である。島の大半は琉球石灰岩層に被われた台地である。沖永良部島は中央部の大山に古生層を基盤として島の大部分は琉球石灰岩に被われており、中部以南では地表水に恵まれ石灰洞穴の地下水「暗河」が発達している。与論島は海拔100メートル以下で20km²の小さな島である。古生層がわずかに露出しているが、その大半は琉球石灰岩に被われており、その地形は起状に富み、とくに東部では高低両地帯が畝状をなし、海に向かって低下している。^(注2) このように奄美的地質は発達したリーフと黒潮の影響も大きく受けている。

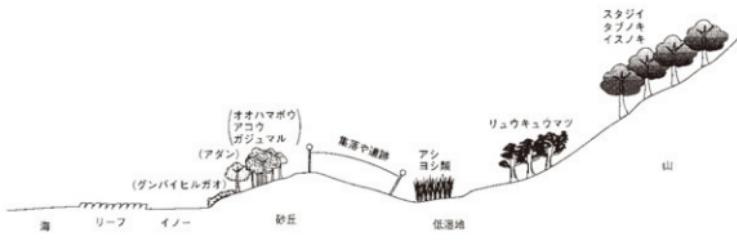
奄美諸島は黒潮が北上しているため、海水温も高く、気候は海洋性亜热带気候である。日平均気温はここ数年の名瀬測候所の観測によれば最高は7月の28°C平均で、最低は1月の14.3°Cである。年較差は12°C前後で気温の差は九州、本州にくらべて少ない。

夏季は南東の風で、冬季は北北西の風が強い、島では前者を「ハエの風」と呼び、後者を「ニシの風」と呼び季節の風を呼び分けている。夏季から秋季にかけては台風の米襲も多いが、今年はもっと少なくまだ11月現在で12号と少ない。しかも奄美に直接大きな影響を与えることなく、年間通して、平均に雨を運んでくれている。このためどの島々でもサトウキビの成育が良好である。こんな年もめずらしい。

奄美大島は北部の笠利半島は低平で海拔183.6メートル（高岳）が最高で淀山、大刈山と半島を東西に分けている。中部、北部は湯湾岳（694メートル）を最高峰に標高400メートルの山々からなる。各集落はこうした山々に囲まれた状況にあり、海に面した集落が多い。三方山に囲まれた集落の立地

条件は奄美の遺跡立地条件と同様の分布傾向にある。(注³) このような地形から考察すると遺跡の分布状況から急峻な地形の陸地を利用するよりも、おだやかな海上交通が主要であったと言えよう。

三方山に囲まれた地形の各集落や遺跡の立地する海岸には発達したリーフがあり、白い砂浜を形成し、後方に集落、そしてその後方は低湿地帯をなしている。海浜にはアコウ、ガジュマル、アダン、オオハマボウなどの常緑広葉樹が多く見られ、砂浜にはグンバイヒルガオ、などが繁茂している。現在では戦後からモクマオウがものすごい勢いで成長し、その植生も変わってきている。



横断略図

奄美の植生も人の手による植林（モクマオウ）と近年の森林開発による伐採が進み、自然植生が残されている部分が少なくなってきた。自然保護団体の方々に言わすと、「もうすでにそんな場所はない」と言える。それぐらい人の手が奥地まで入っていると言える。現在「自然観察の森」「サンクチュアリ」「環境保全区域」などの対策で自然林を少しでも残す対策がとられはじめている。笠利町においてはまだそのような対策はとられていないが地区を町指定にして保護を行っているのが現状である。将来は保全区域的なことも文化財と合わせて考慮する必要があるかも知れない。

第2節 笠利町の歴史的環境

奄美大島の北端に位置し、赤尾木地峡から独立した半島をなしている。大刈山（180.68m）淀山（175.74m）で笠利の屋根をなし、東海岸と西海岸に分けることができる。東海岸側は比較的平地が多く、発達したリーフ、発達した砂丘に恵まれている。砂丘とリーフの関係は深く、発達したリーフには発達した砂丘がある。砂丘形成に何らかの影響があるようと思える。このような砂丘にはほとんど遺跡が所在している。リーフ内外でとれる魚貝類が目的であろう。ひとつのリーフにひとつの砂丘、そしてそこに生活する人々はその人達が生活する生活空間をなしている。東海岸はこのように先史人が生活しやすい環境が整っている。

旧石器時代と思われる遺跡が二つある。イヤンヤ遺跡（笠利町土浜）(注⁴) と喜子川遺跡（笠利町土盛）(注⁵) である。いずれも発掘調査が行われている。ただし、はっきりした遺構、遺物に少し貧しいがその可能性は充分にある。いずれも旧石器に対応する遺物が少ないがもう少し調査を行うと喜子川遺跡などは決定的なものであろう。喜子川遺跡からは火山灰やカーボン測定から25,000年という数字が出ている。イヤンヤ遺跡も同様である。まだ奄美・沖縄に旧石器時代の遺跡が発見されてないが、この二つの遺跡が旧石器時代に認知されるのは時間の問題と思われる。

「丸ノミ型石斧」の発見、近年鹿児島県ノ原遺跡から出土した約1万年前の石斧が注目され「椿ノ



第1図 奄美大島位置図



第2図 奄美大島グスク分布図

番号	遺跡名	所在地	特徴・出土中国製陶器
1	赤峰城	大島郡笠利町笠利	笠利中学校台地全体。
2	ウーバル遺跡	大島郡笠利町笠利	青磁皿、白磁碗
3	辺留城	大島郡笠利町笠利	青磁、白磁
4	辺留窯遺跡	大島郡笠利町辺留	青磁雷文帯碗、印花文碗、白磁、染付碗
5	コビロ遺跡	大島郡笠利町須野	青磁碗、染付碗
6	あやまる城	大島郡笠利町須野	現在、国民宿舎になっている。
7	宇宿貝塚	大島郡笠利町宇宿	青磁通弁碗、青磁盤、染付、白磁玉縁碗
8	宇宿貝塚東地図(だんべ 山遺跡)	大島郡笠利町宇宿	青磁同安窯系皿
9	宇宿・高又遺跡	大島郡笠利町宇宿	白磁碗
10	宇宿港遺跡	大島郡笠利町宇宿	青白磁碗、白磁碗
11	万屋城遺跡	大島郡笠利町万屋	青磁皿、輪花皿、青磁碗、口碗、櫛搔文碗、印花文碗、細通弁文碗盤、白磁玉縁碗、染付、鍋連弁文碗
12	和野トルフ墓遺跡	大島郡笠利町和野	褐釉四耳壺
13	赤木名城	大島郡笠利町赤木名	山の上に居敷跡がある。
14	サウチ遺跡	大島郡笠利町サウチ	青磁盤
15	土浜ヤーヤ遺跡	大島郡笠利町上浜	染付碗
16	用安湊城遺跡	大島郡笠利町用安	青磁双魚藻文皿、白磁端反碗、青白磁碗、玉縁碗
17	フーダスク遺跡	大島郡笠利町用安	青磁、白磁玉縁碗
18	コシマ遺跡	大島郡龍郷町加世間	白磁
19	白間遺跡	大島郡龍郷町戸口	青磁碗
20	嘉渡Ⅱ遺跡	大島郡龍郷町嘉渡	青磁、白磁
21	里遺跡	大島郡龍郷町嘉渡	青碗連弁文磁、盤
22	戸山ヒラキ城遺跡	大島郡龍郷町戸山	青碗連弁文磁、盤、鉢、白磁、黒釉壺
23	戸口城	大島郡龍郷町戸口	平家落人の行盛の居城という。行盛城。山城で空堀などが残る。松本雅明氏の調査で13世紀半ば、15世紀半ばの火災跡が確認された。
24	浦上城	名瀬市浦上	部落後方の小高い丘。平家落人の有盛の居城か。
25	有屋アジ屋敷	名瀬市有屋	山の上に居敷跡がある。
26	おがみ山城	名瀬市永田町	山頂部に堀り切りがある。
27	伊津部勝城	名瀬市伊津部勝	山腹にある。掘り切りを有する。白磁玉縁碗
28	小湊アジ屋敷	名瀬市小湊	平地に居敷跡がある。
29	小湊古墓群遺跡	名瀬市小湊	青磁、白磁皿、碗、褐釉四耳壺、黒釉壺
30	西仲勝城	名瀬市西仲勝	豪族がりやの館址。西仲勝と小湊の間の山にある
31	朝仁貝塚	名瀬市朝仁	青磁印花文碗、青磁皿、染付碗、白磁印文碗
32	小宿城	名瀬市小宿	台地に居敷跡がある。石塁などがある。
33	知名城	名瀬市知名瀬	引水施設がある。詳細不明。
34	根瀬部城	名瀬市根瀬部	部落西方の山の斜面に城址。記録はない。
35	国直遺跡	名瀬市国直	白磁皿
36	毛陣貝塚	大島郡大和村毛陣	青磁碗
37	サモト遺跡	大島郡住用村サモト	青磁連弁文碗
38	住用城	大島郡住用村城	青アジの居城。遺溝は見当たらない。
39	石原城	大島郡住用村石原	展望台になっている。掘り切りを有する。
40	節子遺跡	大島郡瀬戸内町節子	不明
41	倉木崎海底遺跡	大島郡宇検村倉木崎	龍泉窯産、同安窯系、泉州系
42	部連遺跡	大島郡宇検村部連	青磁
43	屋純遺跡	大島郡宇検村屋純	青磁盤、褐釉
44	西古見城	大島郡瀬戸内町西古見	アジ屋敷。部落背後の山が城址。
45	実久遺跡	大島郡瀬戸内町実久	青磁
46	西阿室遺跡	大島郡瀬戸内町西阿室	青磁碗、皿、染付
47	諸鈍城	大島郡瀬戸内町諸鈍	加計呂麻島にある。平家落人の資盛の居城という琉球王朝期、人親の居城。叛乱の際、手々の挙大八日に攻略された。

第1表 奄美大島グスク分道地名表

原型石斧」と命名されている。笠利町から明治年間に「赤木名出土の石器」として雑誌に紹介され、その遺物は現在関西大学に個管されている。大量に出土している地点としては赤木名出土の9点が多い。赤木名のどこで出土したかは不明であり、赤木名にはまだ先史遺跡の発見がない。そのため当時有名だった場所とすれば宇宿貝塚周辺から先史遺物が多く出土し、調査対象になっている。宇宿の可能性もある。いずれにしろ、笠利町からの出土であることには間違いあるまい。そのご宇宿小学校の歴史館からも1点確認されており、この種のタイプの石斧は奄美にも入っていることは確実である。昨年は沖縄本島の北端にある「カヤウチパンタ遺跡」でも出土例があり、その発掘調査も行われている。表探資料だけでも奄美・沖縄・九州と分布する古い遺物の確認は今後南島における旧石器人とその分布、系統にも大きく期待されるところである。

縄文時代の遺跡は国指定史跡宇宿貝塚に代表されるように笠利町においては海岸から少し離れた砂丘上に立地している。現県道の海岸側に立地する遺跡と山手側に立地する遺跡とは時代差がある。縄文時代の遺跡が多く立地するのは後者の方である。

昭和8年に京都大学三宅宗悦博士によって発見された宇宿貝塚はその後昭和30年に九学会連合、^(注6)昭和53年笠利町教育委員会、平成5年～8年と調査が行われている。調査の結果土器標式



喜子川遺跡



イヤンヤ洞穴遺跡

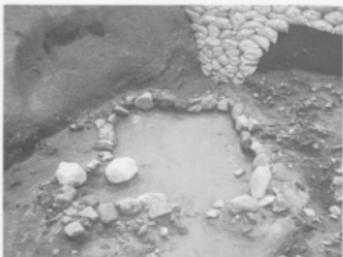
名となる「宇宿上層式土器」「宇宿下層式土器」と命名され、奄美土器編年がなされる基準になった。(註7) 笠利町内にはこうした縄文時代相当期の遺跡が多く残っている。万屋下山田遺跡、長浜金久遺跡などの調査から集石や貝製品も多量に出土し、縄文時代から豊かな貝文化が存在したことが証明された。出土した貝製品は夜行貝製のスプーンや骨製品など奄美では新発見とされるものも多くあった。「宇宿下層式土器」時代の先史人達はさらに南九州との交流もあり、宇宿貝塚では市来式土器や、市来式土器の影響を受けて出来た土器などが出土している。縄文人達は黒潮を南下、北上し交流を行っていたことがうかがえる。

宇宿貝塚では方形の石組住居跡も二軒出土しており、沖縄の仲原遺跡と同様な住居跡ではなかろうかとの指摘があった。仲原住居は方形で石壁を有し、屋根をかぶせた住居がすでに復元されている。このように石を積んだ住居跡が龍郷町ウタ遺跡から発見され、南島の考古学に大きな発見となった。住居を復元するに、堅穴住居、しかも九州や本土のものと同様なのか不明であったが縄文時代の住居は石壁を有する答そのものが発見されたことになる。このことは近日中に報告書がまとめられる予定であるため紹介だけに届めておきたい。

弥生時代相当期の奄美は縄文時代から重宝がされていた貝の文化がさらに北上することになる。貝文化は九州、本州から北海道まで北上している。オオツタノハなどは北海道の人骨に着装された状態で出土しているという。日本列島を北上して伝播したのか中国大陆、韓国、ロシアを経由したのかは不明であるが、南島の貝が北海道から出土しているという事実は確かであり、この点についても大いに注目されている。南方文化と北方文化等についてまた遺跡などから出土する遺物の特徴的なものなど大陸も含めた大きな視点での研究談話会が奈良国立文化財研究所において1999年3月に行われた。南太平洋、中国大陆、日本海、北海道について縄文時代の文化の流れ、住居、農耕、人類学など多種にわたる談話会であった。その中でも奄美のもつ先史文化の意識は深く、沖縄で解明されない部分は奄美に求められており、貝文化等についても大変重要なことである。

弥生時代の土器や貝札が発見され調査が行われた笠利町サウチ遺跡はこれまで九州との弥生文化の影響が不明であったが、土器などの形式から板付式土器やその影響を強く受けた土器等が検出された。これに伴い貝製品も多く夜行貝、サラサバティラ、ホラガイ、シャコガイなどの大型貝も装身具や生活用品として利用されていた。

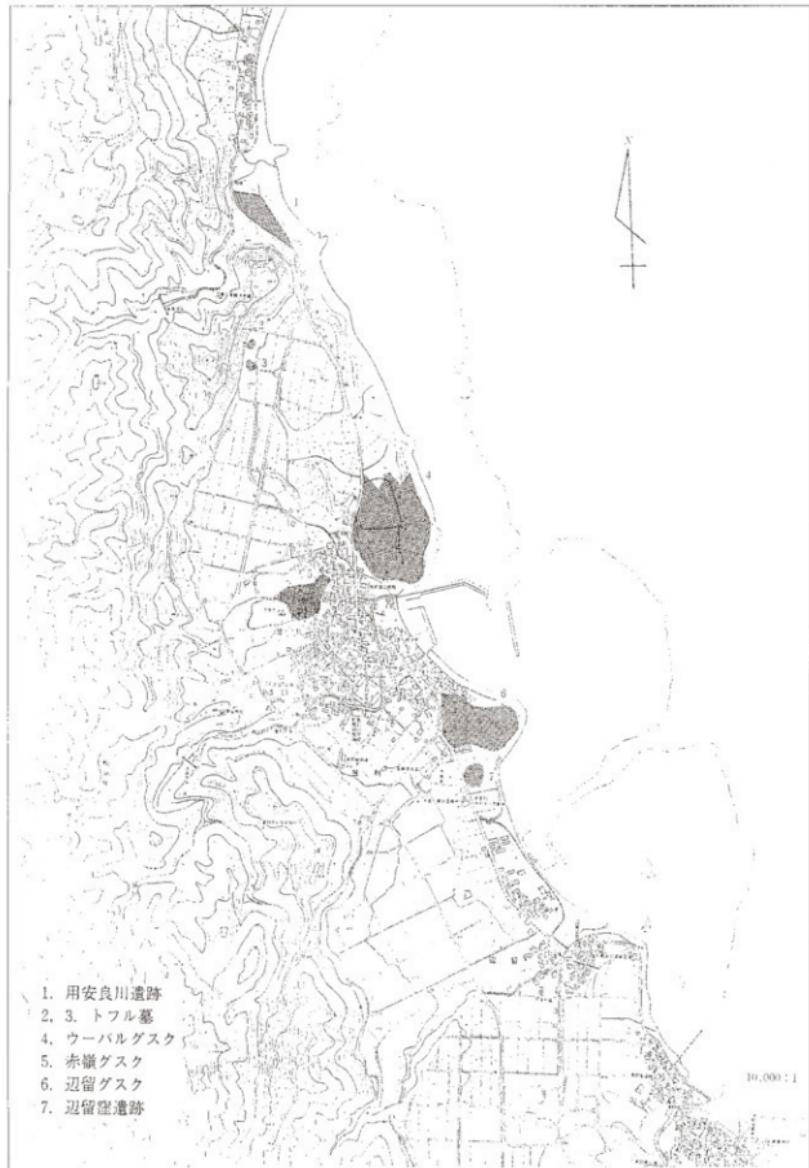
宇宿貝塚では母子埋葬の人骨にガラス玉製のネックレスなども発見されている。弥生文化は着実に奄美へも入っていた。しかし、米などの農耕に関する資料はまだ発見されていない。全体的に奄美の弥生時代は縄文時代と大きく変わることなく、土器や貝を求めてやって来た人々との交流がはじまっ



宇宿貝塚の住居



ウタ遺跡の住居



第3図 ウーバルグスク周辺遺跡分布図

と思われる。そしてしばらくの空白の時代があり、グスク時代へと移って行く。

グスク時代は奄美にとって大きく花開いた時代であろう。大陸との交易を中心に鉄文化が完全に動入、集落化、支配階級などが生まれてくる。グスク時代になると沖縄に先がけて大陸との交流が盛んになり、各地から青白磁の出土も多くなっている。また良港と言われる湾などにはいかり石や沈船の可能性の高い海底遺跡もある。^(注8) 宇検村の倉木崎海底遺跡などは日本でも一番古い海底遺跡の調査事業であり、その三年間の調査成果報告が今春まとめられる予定で進んでいる。他グスク時代については本報告の中で述べることにする。

第3節 遺跡の位置とその周辺

ほぼ東に開口した地形の大笠利地区は南側に辺留グスクの丘があり、直線で約500m北側にはウーバルグスクが立地する丘がある。大笠利集落はこの西に湧入した地形に城前田、里前、金久の三つの集落からなる（第3図）。西の丘には笠利中学校があり、その先端に丘がある。これを赤嶺と呼んでおり、畑からは貝ガラや青磁片が採集出来る。中学校建築時に、整地されており、グスクらしき地形をとどめているのはほんの一部分だけである。中学校は高台になっており、ウーバルグスク（標高約16m）。辺留グスク（標高約13m）より少し高く約20mである。このような地形から大笠利地区は三つのグスクからなっていることがわかる。東に面した海は発達したリーフに囲まれた良港をなし、グスク時代も交易船の出入する港であったことをうかがわせる。現在は波消しブロックや大きなコンクリートの防護壁などで港が整備されている。

三つのグスクからなる大笠利の遺跡調査は今回の発掘調査がはじめてであるが、これまでの踏査で辺留グスクやウーバルグスク、赤嶺グスクから青磁が表採されるなどをの存在も明らかになっていた。特に辺留グスクは「おもうそうし」にも紹介されており、大きな影響を持つグスクであったことをうかがい知ることが出来る。この地域に大きな力をもった勢力があったことだろう。特にウーバルグスク周辺は聖地化されており、グスク南側崖の半洞穴には人骨なども認められていた。崖下南側には集落の神社もあったが、台風の高潮などの被害に合ったため標高約62.7mの集落西側の山に移している。この神社は明治神社と呼ばれている。

ウーバルの台地は琉球石灰岩が発達しており、台地は水はけが良いとも言われ部分的には空洞になっているようだ。大型ユンボなどがよく整地中に大きな穴にはまることがある。小さな空洞が水脈になっているのかも知れない。そのためにグスク西側からいくつかの湧水があり、東側崖下には現在も湧水があふれ出ている。近年までは飲料水として利用していたという。

グスクの立地するウーバル台地は現在畠地になっており、非常に肥えた土地として知られている。台地全体は広く続くためどこまでがグスクであるのか地形では不明である。ただし、南側と東側にはサンゴ石や、土壘部分と思われるものもあり、グスクの遺構の可能性が高い。東側斜面の岩影は人骨が散乱しており、風葬墓として利用されていたようである。このような場所がいくつかある。ウーバルグスクの民俗調査も必要かも知れない。

注1 成尾英仁「琉球列島の地学歩景」「かごしま茶の間の地球科学」昭和56年、南郷出版

注2 波多江信広・露木利貞；郡山 栄『鹿児島県の地質』内外地図株式会社

注3 白木原和美「大島郡笠利町の先史的所見」『南日本文化』第4号 1971年

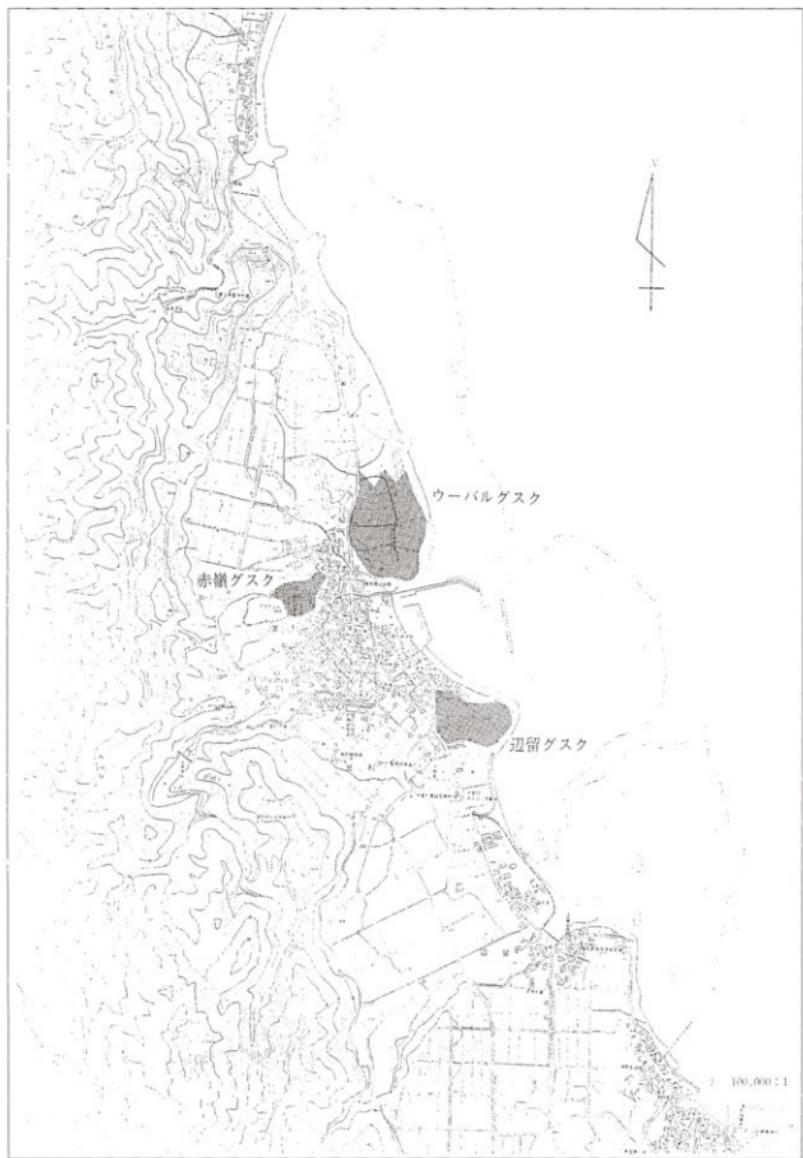
注4 鹿児島県教育委員会「ヤーヤ遺跡」

注5 田村晃一・中山清美「喜子川遺跡」1984年

注6 「奄美」－自然と文化－ 1959年

注7 河口貞徳「奄美における器文化の編年について」『鹿児島考古』9号 1974年

注8 宇検村教育委員会「倉木崎海底遺跡」1998年



第4図 笠利地区的グスク配置図



第5図 ウーバルグスク地形図

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

ウーバルグスクの発掘調査は1997年（平成9年）に道路拡張工事計画が大島支庁土木課から示されたことから始まる。計画区域に埋蔵文化財が所在するかどうかの問い合わせがあった。一応これまで台地で発見されている青磁があることを説明し、調査の必要性が高いので鹿児島県文化財課と連絡を取って対応してもらう。この旨は文化財課へも連絡する。翌年1998年（平成10年5月）に文化財課2名、大島支庁土木課2名、教育委員会1名で現地調査を行う。その結果調査が必要であるとの判断がなされた。

これらの開発に伴う県道工事の調査は県文化財課が対応して発掘調査にあたるが、今回は早急に対応して工事を10年度末に終了させたいとのことであった。大島支庁土木課、県文化財課、教育委員会の三者の協議が再三行われる。その結果ウーバルグスクは本体部分ではなく西端をかすめる程度であるためグスク確認の意味も含めて笠利町で発掘調査を引き受けることになった。

笠利町教育委員会は発掘調査担当者を笠利町歴史民俗資料館職員に指示をし、発掘調査を行うことにした。

第2節 調査組織

調査主体	笠利町教育委員会		
調査責任者	笠利町教育委員会	教育長	福元 廣一
調査担当者	笠利町歴史民俗資料館	副館長	中山 清美
調査指導助言者	鹿児島県教育庁文化財課	埋蔵文化財係長	戸崎 勝洋
々	熊本大学文学部	名誉教授	白木原和美

発掘調査協力者

<一般>中野晴美、河野清文、本間泰伸

<大学生>山田リカ

<高校生>中山廣尚、朝 光介、藤井 亮、吉田直広、福原章吾、有川真志、益満一月、山田千春、中山尚美

発掘整理作業

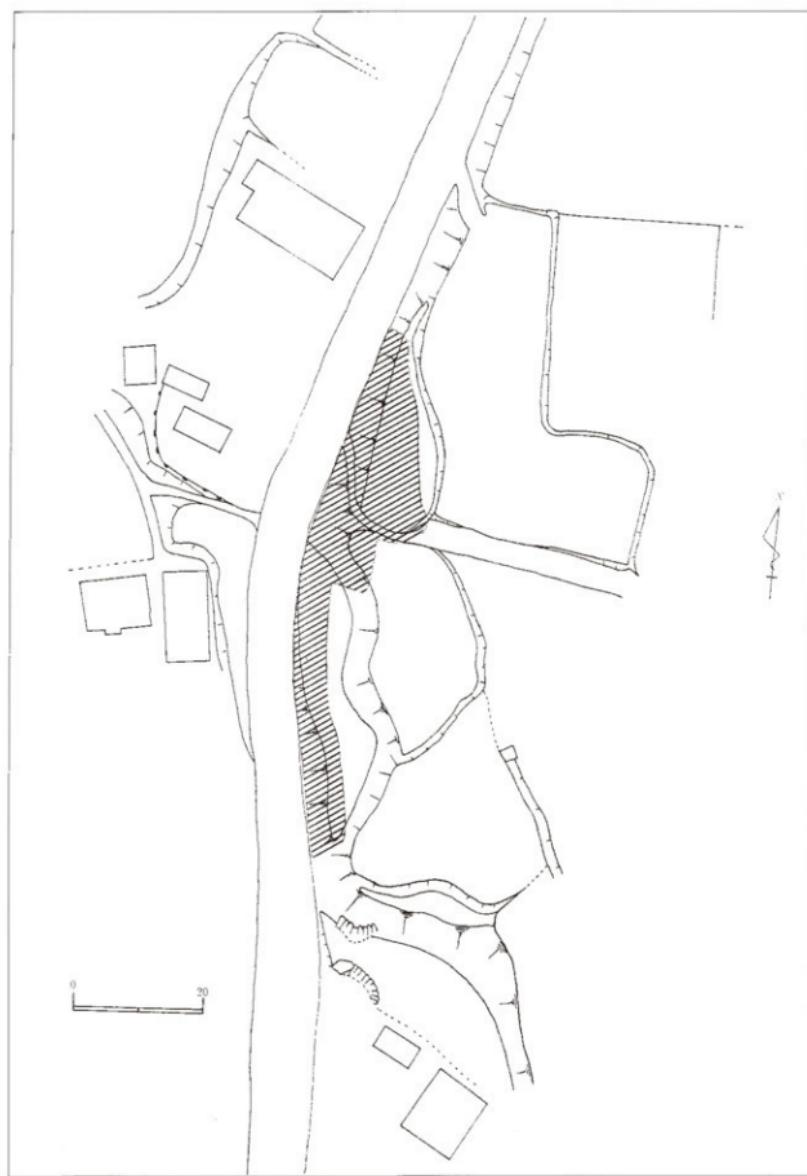
中野晴美、諏訪しげみ

第3節 調査の経過

ウーバルグスクの発掘調査は大島支庁土木課、鹿児島県教育庁文化財課、笠利町教育委員会が協議を重ねて笠利町教育委員会が発掘調査を行うことになる。

発掘調査は1998年（平成10年）8月1日から同年9月25日まで行われた。

8月1日はウーバルグスクの発掘前の写真撮影を行う。カラー、白黒、4×5、リバーサルで記録する。8月3日、発掘調査に必要な準備作業を行う。機材、手続書類のチェック。8月4日からグリットを設定して掘り始める。発掘地点を地形上から2地点、北区、南区と大別して行う。発掘調査は地元高校生を主体に真夏のきびしい猛暑の中で行われた。発掘調査期間中に沖縄県安里嗣淳氏、川辺町教育委員会、写真家竹中孝行氏、浜田康作氏、浜田太氏、作家立松和平氏、福井篤子氏、宇検村教育



第6図 ウーバルグスク調査区域図

委員会、元田信有氏、鹿児島県文化財保護審議会長 三木靖氏、鹿児島大学 大西智和氏、奄美民俗談話会 山岡英世氏、高橋一郎氏、東京大学 石上英一氏、沖縄国際大学学生 松元信光君、青森県埋文センター、熊本大学 白木原和美氏、鹿児島県文化財課 戸崎勝洋氏などが発掘調査期間中に現場を訪れたさんの御教示をいただいた。その他にも地元文化財保護審の先生方、学校の先生方郷土学習に訪れた方々などたくさんの方々が来現した。

北区、南区に分けて調査を行う。南区からは道遺構やサイコロ、青磁などが出土し、グスクへの登り口、通路と思われる遺構である。グスク全体から見て南区はグスクの南西端部分にあたる。登り口部分は現道で少し削れ、北側は畠地にあるため破壊されていた。

北区は高台全体がグスク遺構である。西側にまだ現道を挟んで少し延びるような地形であるが、現道に破壊されており不明である。北側には浅い掘り込みがあり、その中に木が埋められてあった。何であるかは不明であるが、グスクの遺物の一部分ではなかろうか。

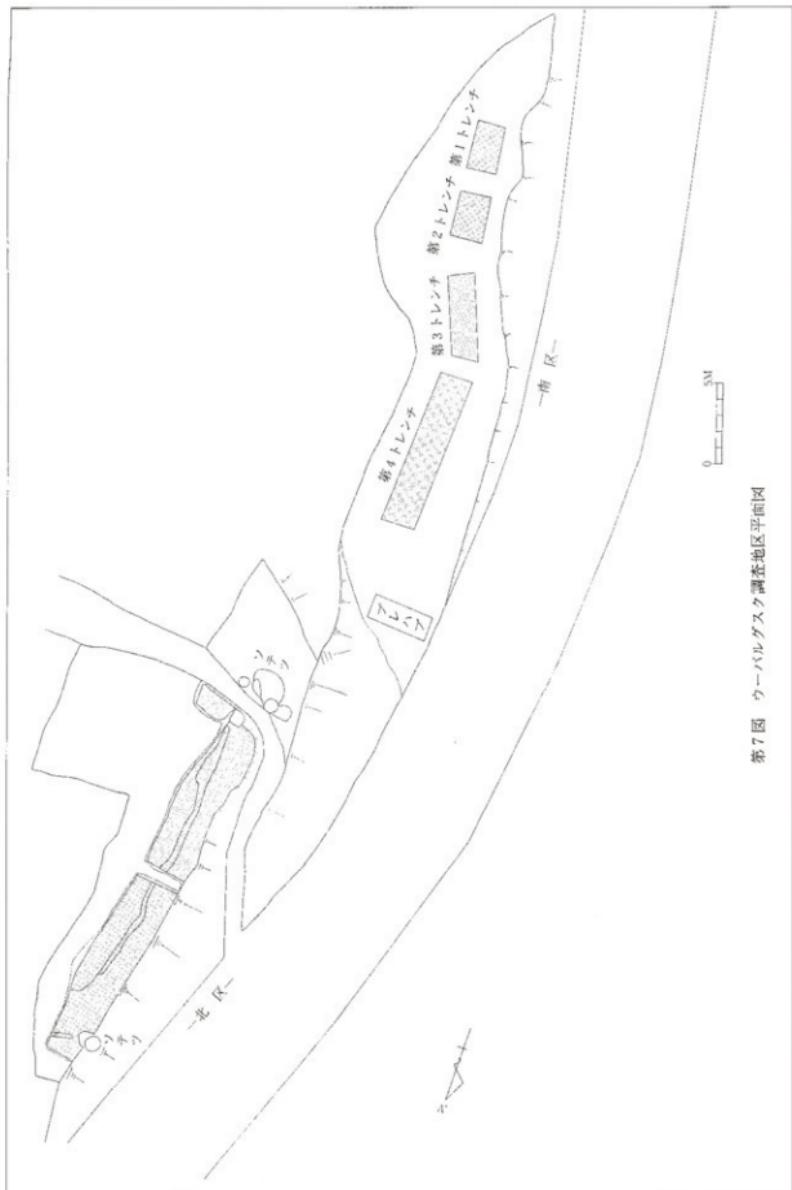
グスク部分にかかる調査区域の発掘調査は途中台風や大雨等もあったが、大きな被害を受けることはなかった。発掘調査は前半は太陽との戦いのようでもあった。これは高校生諸君のパワーで押切った。後半は図面、写真が多くなり、雨や台風で思うように進まなかったが少人数ながらうまく終えることが出来た。途中ハブの出没もあり、調査期間中一番心配していたハブとの戦いにも一応の勝利であろう。でもやはりハブは恐ろしいということを忘れてはいけない。

発掘調査は奄美ではじめてのグスク入口部分の道遺構と骨製サイコロの検出もあり、それなりの成果を得ることが出来た。骨製サイコロ等については国学院大学鈴木靖民氏、酒寄雅志氏、同大学院生 義島栄紀君等にも助言を頂き、松元信光君にも協力をお願いした。



サイコロ（写真指導・鹿児島県埋文センター 鶴田 静彦氏）

第7図 ヴーハルグスク調査地区平面図



第3章 出土遺物・遺構

ウーバルグスク出土遺物はグスク本体からはずれていることもあり、青磁片、サイコロと少なかつた。青磁20点、白磁4点、類須恵器15点、骨製品1点、石器4点である。他は自然遺物の貝類である。

遺構の検出は南区において琉球石灰岩を削った道、道に敷かれた砂利等があった。北区においては丘全体に1段の段差があり北側に掘り込みがあり、その中に埋木が入っていた。

第1節 出土した陶磁器

出土した陶磁器は北区と南区に分ける。第8図1~18、10~14までが南区。9、15~24までが北区の資料である。

第8図1は青磁口縁部である。雷文碗で15世紀前半~中半の特徴がある。第3層出土。2は青磁口縁部の小片である。青磁の碗口縁の一部分15世紀前半~中。第2層出土。3は青磁口縁部近くである。第2層出土。4と5は白磁口縁部である。二つとも玉縁口縁で4の口唇部近くはゆるやかである。5はくびれ部分が明瞭である。5は少しザラついている。4と5とも12世紀中~後半で第4層出土である。6は青磁片碗の胴部である。15世紀代で第1層出土。7は青磁碗の底部近くである15世紀後半第3層出土。8は青磁碗の底部近くである。15世紀前半~中、第2層出土。9は北区出土の白磁口縁部である。10は白磁口縁部分であるが少し内側へ内反している磁碗、14世紀後半~15世紀中、南区第2層出土。11~14までは底部資料である。11は青磁皿の底部で15世紀前半~中。12は青磁鉢の底部で14世紀~15世紀前半である。13はこれまでの資料で比較的大きな青磁碗である口縁部分が欠損している15世紀前半~中。14は青磁鉢の底部である。14世紀後半~15世紀。第3層出土

以上が南区出土の青磁と北、南区出土の白磁である。全体的に古い遺物（12世紀頃）と新しい遺物（15世紀頃）の二つのタイプである。第1層~第3、4層までは新しく、第4層以上は古いものが多い。

北区出土の15は青磁鉢の口縁部分である。14世紀後半~15世紀中。表土。16は口縁部片である。17は青磁碗の口縁部で15世紀前半~中。表土出土。20は青磁碗の底部近くである。15世紀前半~中。21は青磁底部。22は青磁碗底部。15世紀前半~中。23は青磁碗の底部、14世紀後半~15世紀中。24は青磁碗底部。15世紀前半~中。以上が南区北区出土の青磁と白磁である。北区は比較的新しい資料が多い（15世紀頃）。

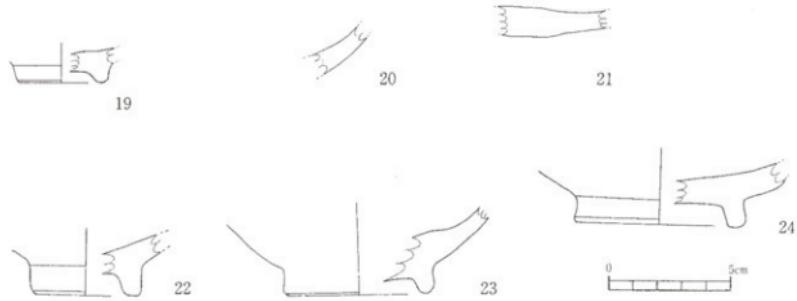
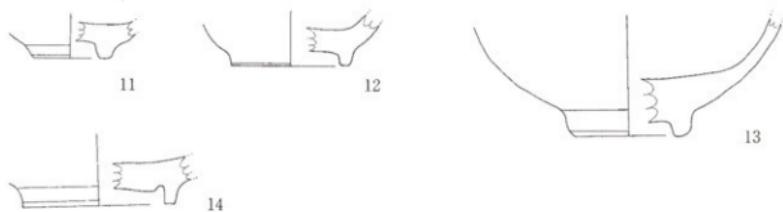
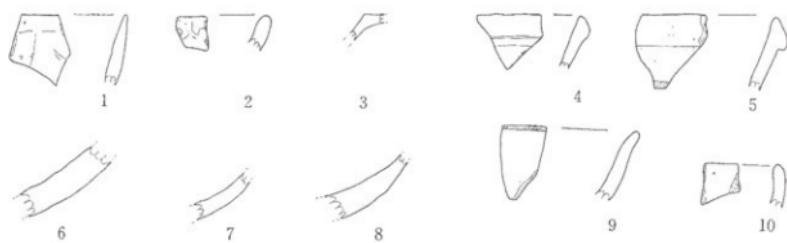
類須恵器14点の図化を行った。資料も青磁、白磁同様少ない資料であった。1~11は南区出土。8~15は北区出土である。第9図。

1は裏に格子痕の一部を有する。2は内外とも条痕を有するいずれも第4層出土である。3は表に条痕、裏に格子痕を有する。第4層出土。4は内外とも無文。5は壺の肩の部分である。いずれも第4層出土。6は底部の一部分と思われる表土。7は底部である。実例図で復元を行ったがかなり大型になった。第3層出土。

南区出土の類須恵器は第4層を主として出土している。カムイヤキ産である。

8は北区出土。裏に格子痕を有する。格子痕ははっきりしたものである。9は裏にロクロ痕有。10は表に叩痕を有する。13も胴部片である。14は表に叩痕を有する。11は裏に格子痕あり。15は底部復元図である裏にロクロ引き痕を有する。

南区、北区出土の類須恵器はいずれもカムイヤキ産である。



第8図 出土遺物 青磁、白磁



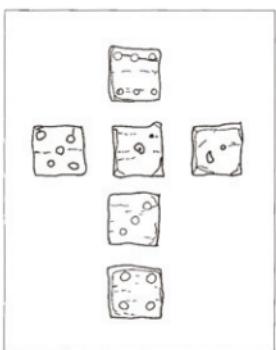
上 1~7 南区 下 8~15 北区

第9図 出土遺物 類須恵器

第2節 石器

石器はグスクに伴うしっかりした資料は少なく、南区遺構（集石）の中に含まれているものの中に入っていた。集石等に当時廃棄されたものと思われる。第11図はいずれも同様な資料である。1は凹石的な利用にされていたか四面に打痕を有する。2は磨石の破片である。3は丸身のある石弾様である。

第3節 出土したサイコロ



第10図 サイコロ図（原寸大）

ウーバルグスクからは発掘資料、表採を含めて奄美ではじめてのサイコロ出土である。

サイコロは1片が約1cm四方で骨製である。サイコロに関する資料は全国的にもめずらしい。沖縄においても出土例は多くない。勝連城からは未完のサイコロも出土しておりグスク内で自己作製品として上原静氏は紹介している。その他にジュゴンの骨を方形にして切り取り目を入れてサイコロを製作する方法、目が7にならないサイコロなどが多い。今帰仁城本丸からも同様なものが出土している。

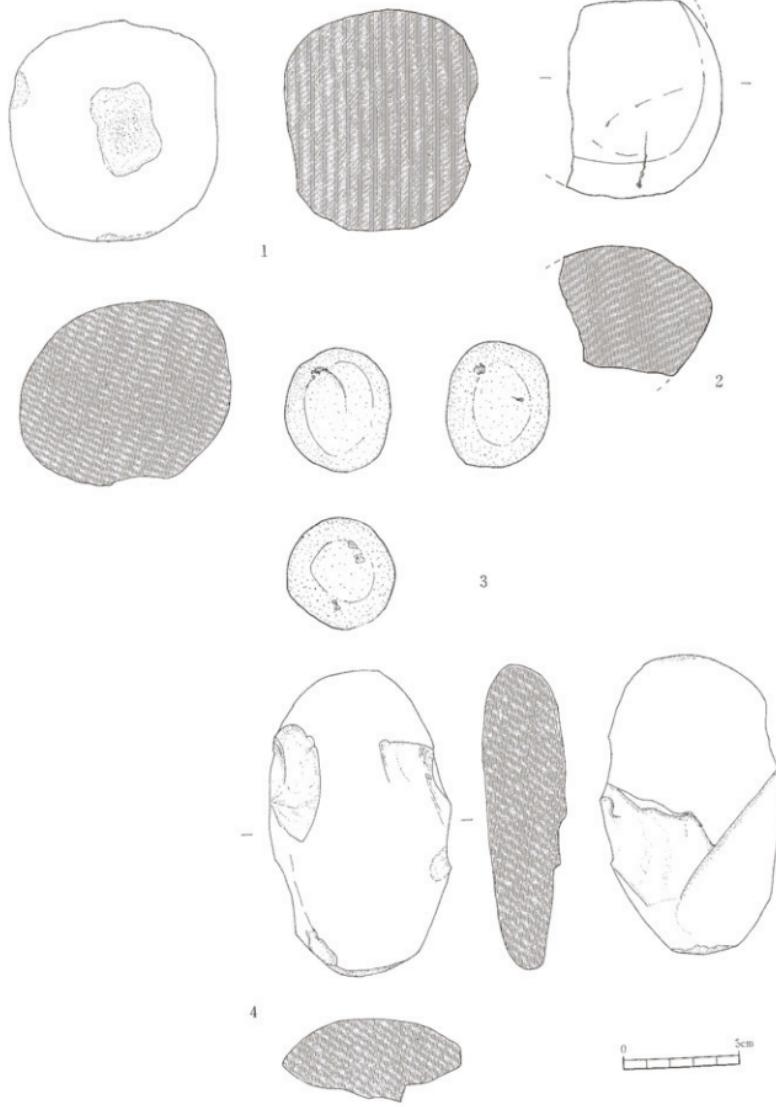
ウーバルグスク出土のサイコロは1個だけの出土であり、第3層出土である。沖縄と同様15世紀前後のものと思われる。今後更に資料の増加によって新たな資料の追加になる。

第4節 遺構

遺構としては南区でグスクの一段低い郭をなす部分がある。おそらく西側にめぐらされていたものと思われる。この南からびる郭の部分は石灰岩を削り東部分（グスク台地）へ延びて行く。幅約1mの小道であるがはっきりした遺構である。グスク入口部分は調査区域外であり一段高い畠地に入るため追加調査をあきらめた。（第12図）。

小道は西側部分が現道工事で削られていることから地盤がゆるく調査期間中の大雨と台風で南北に亀裂が二重に入った。北側部分は畠地にするため整地されており不明である。地山は石灰岩で北側に行くにつれて砂から石灰岩へとなる。

北区における遺構ではっきりしているのは北側に検出された方形の掘り込み遺構だけである。掘り込みはマージ層（赤土）を約10cm程掘り込んでおり、長さ約1m、幅約40cmである。中には木が入っている。木は掘り込み部分から横になって出土しており、何らかの建物遺構に関連するものかも知れない。北区全体は東側が一段高くなってしまっており、西側は段になって少し低い。このことがグスク全体の郭をなす部分の遺構であるのかは不明である。グスクの立地する丘のほんの一部分の発掘調査では不明な点が多い。



第11図 石 器

第5節 層序

ウーバルグスクの基本層序はグスク全体の西端ということもありむずかしい。北区と南区に分けて土層図を作成した。

南区第1区土層断面図 第13図。

第1 層 表土

第2 層 表土（砂、貝を多く含む）

第2Ⅰ層 明褐色層、北側部分にレンズ状に入っている客土。

第2Ⅱ層 明褐色と褐色ブロックが混入。

第2Ⅲ層 赤褐色土層、炭化物も少量含む。

第2Ⅳ層 赤褐色で部分的に違う、何らかの遺構か？

第3 層 暗褐色層

第4 層 暗褐色土層遺物を含み砂粒子が多い（遺物包含層）

第5 層 黒褐色砂層第4層とほぼ同じであるが土色が少し黒い。

第6 層 明褐色砂層、地山。

北区第14図においてはほとんど表土と包含層とマージ層である。表土部分が畑地になっていたため削平されたと思われる。

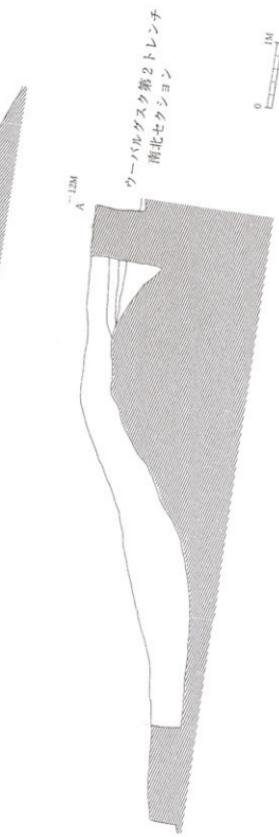
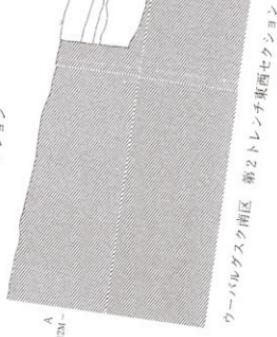
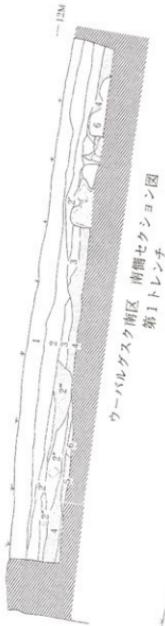
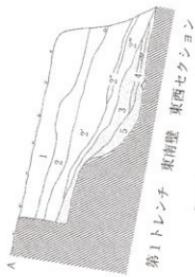
部分的
的な
擾乱



南区第1 グリット東側土層断面



第12图 南区道路遗構平面图



第13図 土層断面図

—10M



南区第3トレンチ 南北断面図



南区 南北断面図



南区 東西断面図



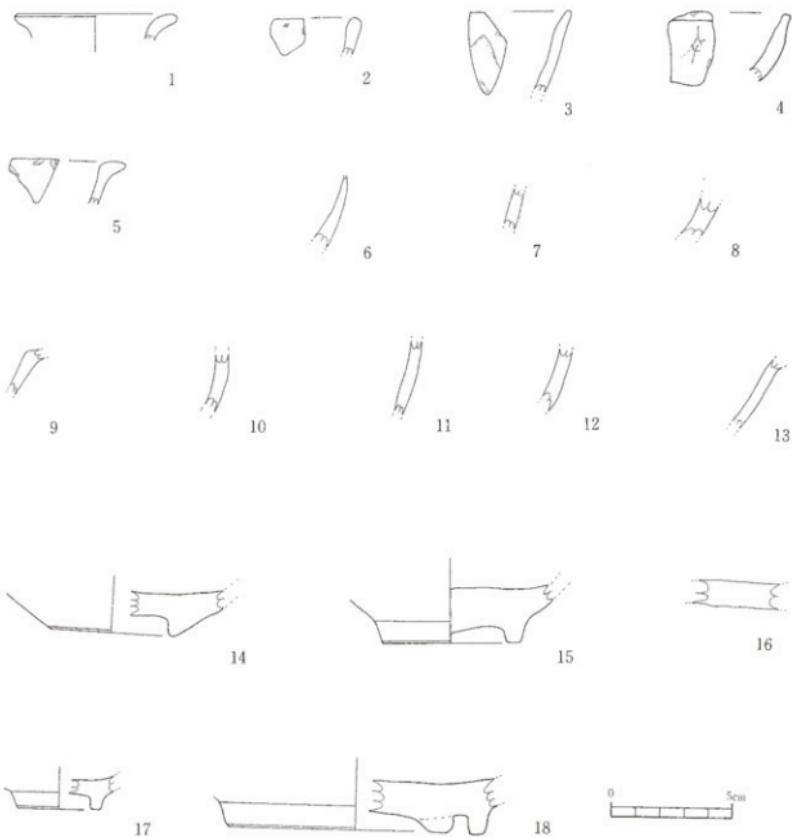
10M(0)



2M(0) —

北区 南北セクション

第14図 土層断面図



第15図 表採資料

第6節 表採資料

表採資料はこれまでウーバルグスクから表採されたものと今回ウーバル台地から表採されたものである第15図。

1は14世紀後半から中の青磁鉢の口縁部分である。2は青磁口縁部で15世紀代と思われる。3は鎌連弁紋碗の青磁口縁部である。13世紀中～14世紀前半。4は青磁口縁部で14世紀後半～15世紀中である。皿の部分かも知れない。5は青磁口縁部鉢である。14世紀後半～15世紀中。6～13は青磁胴部片で小片である。15世紀代と思われる。16は青磁底部の部分で15世紀代。14は青磁盤の底部である。15世紀前半～中。15は青磁碗の底部である。15世紀前半～中。17は青磁皿の底部。15世紀前半～中。18は青磁碗の底部14世紀～15世紀。

第4章 結語

奄美のグスク調査はここ数年になってから分布調査や発掘調査がさかんに行われるようになった。これまでのグスクの立地や地形から1海グスク、2山グスク、3丘グスクなどに大別されその機能的なものも求められはじめている。これはグスク分類においてもその大きさから大規模グスク、中規模、小規模と合わせてもおもしろいことだろう。グスクについてはこれまで沖縄文化圏としてとらえ、沖縄の影響が強い文化と思われていた。しかし、ここ数年沖縄の研究者が度々奄美を踏査され、グスク成立期は沖縄よりもむしろ奄美に求められるのでは?という意見が多くなった。そんななか笠利町安瀬グスク、万屋グスクの発掘調査が行われ、その成果が報告書によって笠利町教育委員会から発行されている。その他に瀬戸内町、宇検村、名瀬市においてのグスクの分布調査も行われており、少しづづその成果が表れはじめている。このようなグスク時代については1998年日本考古学協会沖縄大会において中山が発表を行い、^(注1)新しい論文として白木原和美古希記念論文集の中にもある。^(注2)

奄美には古い12世紀からのグスクと新しい15世紀のグスクがある。の中でも古いタイプは交易との関連もあり、宇検村倉木崎海底遺跡の調査が注目される。立地的には掘り切りを有する山グスクや海グスク、丘グスクの追加調査も行うとかなりの分類が出来、今後のグスク資料になるだろう。

今回はウーバルグスクそのものに大きな期待はなかったが西端ということもあってグスクの郭をなす部分の道造構と台地に広がりを見せる要素があることが判明した。出土遺物でもサイコロの出土であらたな資料の増加になり、単なるパチチとしての利用であるか、信仰によるものか今後注目していきたい。^(注3) その他にも民俗事例がある。海の神と山の神が領地争いでサイコロを使って決めたということだ。干潮の時点の陸地が山の神か、満潮時が山の神のものかということでサイコロで決めて山の神が勝ち干潮時までの江線が山の神のものになったとも言われている。いずれにしろ新しい資料の増加によって今後楽しみである。

ウーバルグスクの確認調査で大笠利地区は三つのグスクから成ることがわかった。これまでの調査によってわかったものでは笠利町用安瀬グスクについて2例目である。今後このような立地条件は増えるものと思われる。喜瀬グスク、赤木名グスク、戸口ヒラキ山、伊津部勝グスクなどその可能性の高いグスクは多い。奄美的グスクの特徴的なものになりそうである。今後はウーバルグスクの本体部分に確認の調査を行う必要があると思われる。辺留グスクも含めグスク調査が沖縄を含めた合同調査が行われるならばもっとその成果が上がることは必至である。

最後になりますが発掘調査時に来現された諸先生方以外に整理作業中にも多くの先生方から御指導を頂きました特に青山学院大学教授田村晃一氏、助手足立拓郎氏、出光美術館金沢陽氏、鎌倉考古研究所手塚直樹氏、神奈川埋文センター富永樹之氏などは二回にわたって出土遺物の検討を行って頂いた。特に今回時代編年を行うために多くの青磁を見て頂き御指導を頂いた。その他にも染付け、古伊万里などの表探資料もあったが今回は紹介しない。ウーバルグスクには表探資料でこれらの資料も多いことを付け加えておきたい。

関係各位の方々などに感謝申し上げます。整理途中からトレース、実測を行った中野晴美さんもコツコツと作業をこなして頂いた。

注1 中山清美「かたちから見た奄美的グスク」『日本考古学協会1998年度沖縄大会』1998年

注2 中山清美「発掘された奄美的グスク」『白木原和美古希記念論文集』 1999年

注3 宮 宏明「いかさま博奕と考古学」『動物考古学』動物考古学研究会 1997年

番号	層序	遺物名	備考
第8回 1	南区第1第3層	青磁雷文碗	色調10G Y明緑灰8/1 15世紀前半～中
第8回 2	南区第2層	青磁碗	色調10Y灰白7/2 15世紀前半～中
第8回 3	南区第2層	青磁	色調10G Y灰白8/1
第8回 4	南区第1第4層	白磁玉縁碗	色調2.5G Y灰白8/1 12世紀中～12世紀後半
第8回 5	南区第1グリット第4層	白磁玉縁碗	色調10Y Rにぶい黄橙 12世紀中～後半
第8回 6	南区第2トレンチ表工	青磁碗	色調10Yオリーブ灰4/2 15世紀代
第8回 7	南区第1グリット第3層	青磁碗	色調5G Y灰白8/1 15世紀前半～中
第8回 8	南区第2層	青磁碗	色調10Y灰灯7/2 15世紀前半～中
第8回 9	北区	白磁	色調7.5Y灰白8/2
第8回 10	南区第2層	白磁碗	色調2.5G Y灰白8/1 14世紀後半～15世紀中
第8回 11	南区第2トレンチ	青磁皿	色調10Yオリーブ灰6/2 15世紀前半～中
第8回 12	南区第2層	青磁鉢	色調10Y灰白7/2 14世紀後半～15世紀前半
第8回 13	南区第2トレンチ	青磁碗	色調5Yオリーブ灰6/2 15世紀前半～中
第8回 14	南区第1第3層	青磁鉢	色調10Y灰白7/2 14世紀後半～15世紀中
第8回 15	北区表工	青磁鉢	色調10Yオリーブ灰6/2 14世紀後半～15世紀中
第8回 16	北区	青磁	色調7.5Y灰白7/2
第8回 17	北区	青磁碗	色調10Y灰白7/2 15世紀前半～中
第8回 18	北区表工	青磁皿	色調7.5Y灰オリーブ6/2 15世紀前半～中
第8回 19	北区表工	青磁皿	色調10Y灰白7/2 15世紀前半～中
第8回 20	北区第3層	青磁碗	色調7.5Y浅黄7/3 15世紀前半～中
第8回 21	北区表工	青磁	色調7.5Y灰オリーブ5/2
第8回 22	北区表工	青磁碗	色調10Y灰白7/2 15世紀前半～中
第8回 23	北区	青磁碗	色調7.5Y灰オリーブ6/2 14世紀後半～15世紀中
第8回 24	北区第3層	青磁碗	色調7.5Y灰白7/2 15世紀前半～中

第2表 出土遺物観察表（1）

番号	層序	遺物名	備考
第9図 1	南区第1グリット第4層	類須恵器 胴部	色調表N5/1 ⑨5B明青灰7/1
第9図 2	南区第1グリット第4層	類須恵器 胴部	色調表10Yオリーブ灰5/1 ⑨10G Y緑灰6/1
第9図 3	南区第1第4層	類須恵器 胴部	色調表7.5Y灰5/1 ⑨10B Y青灰5/1
第9図 4	南区第1グリット第4層	類須恵器 胴部	色調表10YRにぶい黄橙6/3 ⑨5Y灰5/1
第9図 5	南区第1グリット第4層	青類須恵器 胴部	色調表10Y灰4/1 ⑨5GYオリーブ5/1
第9図 6	南区第2トレンチ表工	類須恵器 胴部	色調表2.5GYオリーブ灰6/1 ⑨7.5Y灰6/1
第9図 7	南区第1トレンチ3層	類須恵器 底部	色調表10Y灰4/1 ⑨10Y灰4/1
第9図 8	北区表工	類須恵器 胴部	色調表10R暗赤褐8/2 ⑨10R黒2/1
第9図 9	北区	類須恵器 胴部	色調表10Y灰5/1 ⑨10GY明緑灰4/1
第9図 10	北区	類須恵器 胴部	色調表7.5Y灰4/1 ⑨5灰5/1
第9図 11	北区	類須恵器 胴部	色調表7.5Y灰4/1 ⑨5GY明オリーブ灰4/1
第9図 12	北区表工	類須恵器 胴部	色調表10Y灰5/1 ⑨5Y5/1
第9図 13	北区表工	類須恵器 胴部	色調表10Y灰5/1 ⑨N灰6/1
第9図 14	北区第2トレンチ	類須恵器 胴部	色調表5Y灰5/1 ⑨10Y6/1
第9図 15	北区	類須恵器 底部近く	色調表10YR灰黄褐5/2 ⑨7.5Y4/1

第3表 出土遺物観察表(2)

番号	層序	遺物名	備考
第15層 1	表採	青磁鉢	色調5 G Y灰白8/1 14世紀後半～15世紀中
第15層 2	表採	青磁口縁部	色調7.5Y灰オリーブ6/2 15世紀代
第15層 3	表採	鎬連弁文碗	色調10G Y明緑灰8/1 13世紀中～14世紀前半
第15層 4	表採	青磁皿	色調⑥10Y オリーブ灰6/1 ④10Y 灰白8/1 ⑦10Y 灰白7/2 14世紀後半～15世紀中
第15層 5	表採	青磁鉢	色調10Y 灰白7/2 14世紀後半～15世紀中
第15層 6	表採	青磁胴部	色調5 G Y灰白8/1 15世紀代
第15層 7	表採	青磁胴部	色調10Y オリーブ灰6/2 15世紀代
第15層 8	表採	青磁胴部	色調5 G 明緑灰7/1 15世紀代
第15層 9	表採	青磁胴部	色調5 G Y灰白8/1 15世紀代
第15層 10	表採	青磁胴部	色調5 G Y灰白8/1 15世紀代
第15層 11	表採	青磁胴部	色調5 G Y明緑灰7/1 15世紀代
第15層 12	表採	青磁胴部	色調10Y 灰白7/2 15世紀代
第15層 13	表採	青磁胴部	色調10Y 灰白7/2 15世紀代
第15層 14	表採	青磁盤	色調⑥10Y オリーブ灰6/2 ④5 G Y オリーブ灰6/1 ⑦10Y オリーブ灰6/2 15世紀前半～中
第15層 15	表採	青磁碗	色調⑥10Y オリーブ灰6/2 ④7.5Y 灰白8/2 ⑦10Y オリーブ灰6/2 15世紀前半～中
第15層 16	表採	青磁底部	色調⑥10Y 灰白7/2 ④7.5Y 灰白7/2 ⑦10Y 明緑灰8/1 15世紀代
第15層 17	表採	青磁皿	色調⑥5 G 明緑灰7/1 ④7.5Y 灰白7/2 ⑦5 G 明緑灰7/1 15世紀前半～中
第15層 18	表採	青磁碗	色調⑥10Y 灰白7/2 ④2.5G Y 灰白7/2 ⑦10Y 灰白7/2 14世紀後半～15世紀中

第4表 出土遺物観察表（3）

貝（北区）

場所	調査年月日	貝の種類
○北区 第1層	98.9.21	○ハナマルユキ ○オニノツノガイ
○北区 第2層	98.9.21	○アマオブネ ○マガキガイ ○ハナビラダカラ ○ハナマルユキ ○ニシキノキバフデ
○北区 第3層		
○北区 第1トレ	98.8.8	○チョウセンサザエ
○北区 第2トレ	98.8.8	○ハナマルユキ ○アマオブネ
○北区 第3トレ	98.8.8	○アマオブネ ○ハナマルユキ
○北区	98.8.	○ニシキノキバフデ ○マガキガイ ○オニノツノガイ ○ヒメジヤコ ○マダライモ ○ハナビラダカラ ○ハナマルユキ ○ニシキウズ ○マルサザエ ○アマオブネ ○イソハマグリ ○ホソスジイナミガイ ○ムラサキイガレイシ ○イボカバイモ ○シラクモガイ ○チョウセンサザエ
○北区表土	98.8.	○イソハマグリ ○ホソスジイナミガイ ○サメザラ ○アカイガレイシ ○マガキガイ ○ハナビラダカラ ○ハナマルユキ ○ヒメジヤコ ○シラクモガイ ○オニノツノガイ ○アマオブネ

第5表 自然遺物貝（1）

貝（南区）

場所	調査年月日	貝の種類
○南区 第1トレ	98.9.11 98.8.8 98.8.8 98.8.8 98.8.8	○夜光貝 ○マガキガイ ○イソハマグリ ○アマオブネ ○キイロダカラ
○南区 第1トレ表層	98.8. 98.8. 98.8. 98.8. 98.8.	○ハナマルユキ ○キイロダカラ ○ハナビラダカラ ○ヤキイモ ○アマオブネ
○南区 第1トレ3層	98.8.	○ハナマルユキ アマオブネ
○南区 第1トレ第4層	98.8.25 98.8.25 98.8.25 98.8.25 98.8.25	○オニノツノガイ ○ハナマルユキ ○アママオブネ ○マダライモ ○マガキガイ
○南区 第1グリット第4層		
○南区 第2トレ		
○南区 第2トレ表層	98.9.3 98.9.3	○イソハマグリ ○ヒメジャコ
○南区 第2トレ表土	98.8. 98.8.	○マガニガイ ○アマオブネ
○南区 第3トレ	98.8.7	ナミノコマスオ
○南区 第3トレ表土		
○南区 第3トレ表土層		

6表 自然遺物貝（2）

付 説

ウーバルグスクに関わる昔話

中野 晴美

ウーバルグスクの発掘調査に参加していると地元の古老たちやテル（背おいカゴ）をかついだおばさん達が近寄って来て話をする。「ここは良くハブが多く出没する場所だから気を付けなさい。」「ここは神様が宿っているから必ず塩をまきなさい」「ここは首のないブタも出没するから足を開いて通してはいけませんよ」などとたくさんの事例を聞かせて頂いたのもっと知りたくなりました。民俗事例の一助にでもなれば楽しいと思います。

ウーバルグスクとは地元では上にある広い畠という意です。台地の畠のことかも知れません。昔風葬墓や神社があった場所、民謡にも出てくる地名だそうです。

昔、おごらという所に神社があった。おごらとは、海とウーバルにのぼるふちの所をいう。その神社の名は、「明治神社」と言うそうです。戦前、明治神社の本体は、都会に持っていたらしい。理由は、分からぬが、管理する人が亡くなったためと言われています。この神社は、かわらぶきで、狛犬や石の灯籠が両側にあり、石の階段がたくさんあったそうです。今では、大笠利ダムの上の方に神社は移されています。

ウーバル周辺には、「おごら、くばま、うていご、しゃご、ウーバ、まつもと、やんご、やねきいぢや、くうぶ」など、様々な場所があります。昔は、いたる所に納骨してあり、その場所に夜七日間通って、火をつけに行っていたそうです。これを、七日灯籠というそうです。今では、一つの場所に納骨ですが、それをまとめた時には、お祭りをして供養したという事です。その当時、骨と一緒に刀も、いくつか発見されたらしい。

農業には、かかせない土。ウーバルの土は昔から、ウシなどを飼っていたため粪や、堆肥などで土には多くの栄養が含まれている。昔は、自給自足の生活でした。家の敷地内では、ウシなどを飼っていたので畠に行く人は必ずテルに堆肥を入れて持っていました。今でも、ウーバル以上に土の良い所はないと、言われています。

ウーバル近くには、昔、製糖工場があり、今でも製糖工場の跡が残っています。井戸もあったそうです。その井戸の周辺で多くの人たちが人魂を見たらしく、その中の一人から「ビックリして、持っていた皿を落とした」という話も聞きました。

今回は発掘調査期間中に立ち寄ったおばあちゃん達と立ち話し程度の話しをメモしたのをまとめました。もっとたくさんの方々からの聞き取り調査を行えば、もっとウーバルのことがわかりそうな気がしました。



ウーバルグスク遠景
(南より)



ウーバルグスク
笠利集落後方南西より



笠利集落後方西側より



用集落頂上より（北側）



ウーバルグスク東側

ウーバマ海岸より



ウーバルグスク東側

ウーバマ海岸より近影



ウーバルグスクの植物
(パパイヤ・バナナ)



ウーバル海岸



澗下の墓（風葬墓跡）



北区 北西側から発掘前



北区
西側から発掘中



北区
南側から



北区有段状をなす台地



発掘スナップ (北区)



有段南側から (北区)



北区



北区発掘スナップ



ユンボの使用（北区）



北区

グスク層検出



北区

溝斜面



北区

土納結め



南区 発掘作業



南区

北西より



南区

南より





南区

スナップ1



南区

スナップ2



南区

スナップ3



南区
土納結め



南区 発掘作業



南区
第3 トレンチ



南区

スナップ



南区

亀列入いる



南区

亀列部分を取り除く

北区出土青磁



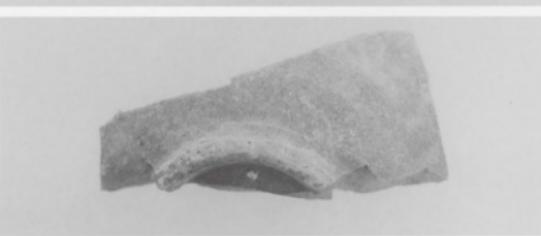
ウーバルグスク表採青磁



ウーバルグスク表採青磁



南区第2トレンチ出土青磁



出土遺物



現場指導
白木原和美氏



整理状況



出没して
とらえられたハブ公

笠利町文化財調査報告書第25集
ウーバルグスク発掘調査概報
発行日：1999年3月31日
発 行：笠利町教育委員会
(笠利町歴史民俗資料館)
印 刷：(有) 鮮明堂

